宮崎里司先生
2002 年前期　理論研究「第二言語習得論」
プロジェクト・ワーク B

―接触場面のディスコースにおける調整行動の分析―

早稲田大学大学院日本語教育研究科Ｍ１
氏　　名：麻生貴美
学籍番号：u02a0000

提出期限：7 月 24 日

０．はじめに

言語習得の領域において、krashen のインプット仮説以来、第二言語の習得を促進する要因として、「理解」と「理解可能なインプット」が中心的なテーマとして取り上げられてきた。そして、母語話者が非母語話者の言語能力不足からくる負担を軽くするために、自分の話し方を「調整」することが非母語話者の理解を促進する主な方法であるという主張がなされた。（Hatch1978, Long1981）その後の意味交渉研究は、接触場面において生じた問題の解決が、発話者である母語話者と非母語話者の双方によってなされるとしたものである。

このレポートでは、その意味交渉についての具体的事例を知るために、接触場面におけるディスコース上における母語話者と非母語話者間の調整行動の分析を行った。Miyazaki（1997）は、接触場面で起こった不適切な問題を処理する調整行動について調整パターンを提示し、調整行動を促す引き金（Trigger）、または刺激となる発話行為を調整マーカーとよび、調整行動を引き出す役割を果たすとしている。この調整マーカーには、相手恩発話者に直接調整を要求する「調整要求マーカー」、不適切さはマークするが、直接調整の要求は行わないフラッグ、さらに発話者自身による不適切さのマーク及び調整の要求は行わないが、相手の発話者が直接調整を行うことで、結果的に問題があったことをしらせ次の発話の参考にさせるサポート・マーカーの 3 種類がある。また、1 回だけの調整に基づく発話交換を「単純調整」、連続した調整行動の連鎖を「複合調整」と呼んでいる。（Miyazaki1999）そして、どのように調整が行われるのかという調整デザインについても、エスノメソドロジーの会話分析派が提唱する「調整軌道」というメカニズムの会話分析の視点から、この調整パターンの定義を参加者が調整過程でどのような役割分担をするか、つまり誰がその問題をマークし、調整行動をとるかに着目し、そのバリエーションを提示している。（宮崎 2002）まず、調整行動を行う参加者のタイプを自己調整タイプ（話し手自身、つまり自己が調整をデザインするもの）と、他者調整タイプ（聞き手が調整をデザインするもの）の二つのタイプがあるとしている。前者の自己調整タイプには、相手の発話を理解するための「他者マーク自己調整」と話し手自身が不適切さをマークし、調整のデザインを行う発話の過程で現れる「自己マーク自己調整」がある。また後者の他者調整タイプには、話し手が不適切さをマークし、聞き手に調整を要求する「自己マーク他者調整」と、話し手が調整行動に全く参加しない「他者マーク他者調整」がある。さらに、自らの間違いに気づき、不適切さをマークしたにも関わらず、調整を行わない「自己マーク無調整」、また、聞き手が話し手の誤りに気がつき、不適切さをマークしたが何らかの理由で調整を行わなかったものを「他者マーク無調整」とし、この６つを調整モデルの基本形としている。今回のレポートの枠組みにはこの 6 つの調整モデルを使用し、分析する。

Ⅰ．調査方法

本稿では、まず初めに 2 者間における調整行動の分析を行った。会話資料は、日本語母語話者（以下 NS）と、調査対象者である日本語非母語話者（以下 FS）の雑談を録音したものを使用した。双方とも、早稲田大学大学院の大学院生である。FS の年齢は 24 歳で、以前交換留学生として日本に 10 ヶ月留学した経験を持つ。今回は 2 度目の来日であり、来日してから 3 ヶ月になる。録音場所は早稲田大学校内で、6 月２８日に採取した。録音時間は約 15 分である。

Ⅱ－１．分析結果

15 分間の会話の中に、全部で 9 つの調整行動のタイプが現れた。以下、順を追って分析していきたい。

例1：

調整モデル：①②自己マーク他者調整、（FS マーク）
フレームデザイン：複合調整
調整マーカー：①②調整リクエストマーカー（理解確認要求）

1　FS：今度はブラジル対…（Flag）
2　NS：と、ドイツ。
3　FS：あ、ブラジル対ドイツ、あと韓国はもう一つの決戦があるよね。
4　NS：あー三位決定戦。
5　FS：韓国とト…トルク？（自己マーク①）
6　NS：う、うんトルコ？　（他者調整）
7　FS：トルコ？トルコよね？（自己マーク②）※他者マーク
8　NS：うん。　（他者調整）　自己調整？→不成立

この例では、意味交渉ではないが、最初の発話１で FS が途中まで言いかけて、会話が切れている部分があった。この部分では「相手の発話の促し」が行われており、相手に自分の発話を補ってもらおうとして、途中まで言いかける「交渉」が行われている。これは意味交渉ではないが、ある種のリクエストが行われていると考えられ、不適切なマークはしたものの、直接調整を行わない「フラッグ型」であると言える。

次に、５で、FS は「Turkey」という英語での意味、発音は知っていたが、日本の表記「トルコ」という言い方、もしくは発音に自信がなかったため、推測して発話している。ここで発話者自身が音韻上の選択過程で問題があると自己マークし、上昇イントネーションで NS にチェックを求めており、調整リクエストマーカーとしての役割を果たしている。しかし６で NS は FS が発した発音が／torωko／なのか／torωkω／なのか、はっきり判断できないまま、「トルコ」についての質問だろうと検討を付け、トルコのことを言っているのか、という意味で「トルコ？（↑）」と同じく上昇イントネーションで発話した。それに対して７で FS は理解がまだ十分でなかったため、再度交渉を続け、繰り返しの調整リクエストマーカーによって、理解確認要求（尾崎 1993）を行っており、ここで調整が連続して起こる「複合調整」が行われている。なお、この部分では当初上記のように、コーパス上では、再度確認する自己マークか、NS の発話に対してマークした他者マークの 2 つの調整パターンが考えられた。この後すぐにフォローアップ・インタビューを行ったところ、やはり理解すると同時に確認要求を行っていたことが分かり、前者の「自己マーク他者調整」であることが判明した。

例2

調整モデル：①他者マーク自己調整　（FS マーク）
②自己マーク他者調整　（FS マーク）
フレームデザイン：複合調整
調整マーカー：①調整リクエストマーカー（反復・説明要求）
②調整リクエストマーカー（理解確認要求）

1　NS：好奇心を持って。あと….
2　FS：いろいろ角度から考える。
3　NS：やっぱり、あの、新聞を読んだりして…..興味のあるテーマがあるとするでしょ？
　　例えば、あの、審判問題とか。
4　FS：審判問題…..**（他者マーク）①**
5　NS：あのーサッカーの。審判。**（自己調整）**
6　FS：あ、ああー。、審判は….これかな。（書きながら）**（自己マーク）②**
7　NS：違うよ。審判はこの字。（書く）　**（他者調整）**
8　FS：あ、ああ。そっか。

この例では、場面は FS からの「自分は国で物事を論理的に考察する訓練を受けていなかった」という相談に対する NS からのアドバイスが行われている。FS は３で NS の発した「審判問題」という語彙が理解できず、４で不適切さをマークし、語彙を反復する聞き返しのストラテジーを使用し、調整リクエストとして機能させた。それに対し、５で NS は言葉を加えて説明を行ったが、FS は意味が理解できたものの、文字を書き留めることによって自分の理解が正しいか再度確認を行った。しかし、その漢字が違っており、再度 NS は７で紙面上での調整を行っている。よって、意味が理解できた時点では「単純調整」と言えるが、その後表記による確認を行っており、ここまで含めると「複合調整」となる。この「複合調整」はマークをしているのは同じ人物 FS であるに変わりないものの、同種の RC が行われているわけではなく、FS が聞き返しのストラテジーを使い分けていることが分かる。

例3：

調整モデル：他者マーク他者調整（NS マーク）
フレームデザイン：単純調整
調整マーカー：サポートマーカー

1　NS：捨てるよりはいいよね。じゃ、持ってかえって。毎日鏡、掃除して。
2　FS：あ、それも語彙の一つの練習と思う。
　　（小さな声で）語彙伸びたい…。私の語彙….すくな..
3　NS：鏡を磨くのが？
4　FS：じゃない、じゃない、じゃない、じゃない。
　　語彙….日本語の語彙、は、どうやって伸びたらいいのか…
5　NS：伸ばしたらいいのか。　**（他者マーク他者調整）**
6　FS：あ、そっか…伸ばしたらいいのか。そう。

この例の場面では、FS が自分の学習法について NS に相談を行っている。NS が「新聞を学校に持ってくるから、それで勉強したらどうか」という提案を行い、その後、一度別の話題に逸れたが、２で FS は突然、再度自分の学習法に TOPIC を戻した。NS は FS が時々このように前後のつながりなく TOPIC を変えることを知っていたため、それを暗に知らせようとして冗談を交え、示唆しようとして３のような発言をしており、これは意味の不理解のための聞き返しではない。よって、ここでは不適切なマークとしては扱わなかった。その３での NS の発

言に対し、４で FS は否定的な反応を大きく示し、２での自分の発話の内容を説明しようとするが、発話内容に他動詞と自動詞を間違えるという語彙的な誤りが表出された。実は２でも同様にこの間違いは発話されていたが、NS が気がつかず、不適切マークとしては成立していない。よって、５で初めて NS によって不適切なマークがなされ（サポートマーカー）、直接調整を行っており、これは他者マーク他者調整の「単純調整」であると言えよう。

例４：

調整モデル：自己マーク自己調整（NS マーク、自己複合調整）
フレームデザイン：複合調整
調整マーカー：不適切マーカー（確認チェック）

1　FS：私もなんか語彙の勉強がしたいから…この前、ちょっと本屋さんで本を買った。
　　面白い本、なんか美しい日本語？ちょっと日本語の…
2　NS：ああー。
3　FS：それ、と関連がある….面白くてー。まだ見てないけどー。
4　NS：そうなん？
5　FS：見たいけどー。
6　NS：ねえ、「積読」って知ってる？　**（自己マーク）**
7　FS：つ、つんどく？知らない。それ、なんていうんですか？
8　NS：教えない。
9　FS：早く教えてよー。
10　NS：…ほら、読むって言う字があるでしょ？これ、「どく」って読めるでしょ？
　　（書く）そして、積んでおく、のこれを縮約形にするでしょ？**（自己調整１）**
11　FS：つんどく。
12　NS：うん。そしたら、「つんどく」で、「どく」を…..これが….読むという字になるじゃない**（自己調整２）**
13　FS：そっか。これは自分で作った？
14　NS：ちがう、ちがう。

ここでは、NS と FS が日本語の本について話し、NS は１から５までの話の内容（FS が買ったまま読んでいないという発言）から、NS は「積読」という言葉を思い出し、６で発話しようとするが、この語彙が俗語であるため FS が理解上の問題を起こす可能性を考え、６で「～って、知ってる？」という表現形式によって確認チェックを行った。これは、言葉を発する前から NS 自身が自分の発しようとする言葉に対して不適切さをマークし、自ら調整をデザインしている。よって、これは自己マークであると考えられるが、不適切な発話をしているわけではないため、外に表出されない意識下でのマークとして捉えた。つまり、不適切さは文字上に現れていないため、不適切マークであるか、または単なる質問であるとも考えられ、分析が分かれるところである。

その後、NS は意味の説明を行うため、FS の理解を確認しながら調整を 2 回に分けて段階的に行っている。これは６の自己マークに対する自己調整であり、また、段階的に行っていることから複合調整であると言える。

例５

調整モデル：	①他者マーク無調整　（NS マーク）
	②他者マーク無調整　（NS マーク）
	③他者マーク他者調整（NS マーク）
フレームデザイン：複合調整	
調整マーカー：	①不適切マーカー（無調整）
	②不適切マーカー（無調整）
	③不適切マーカー（繰り返し）

１　NS：私に電話した？
２　FS：えっ。ないよ。
３　NS：あ、そう…. （他者マーク無調整）①
　　私、携帯うちに忘れちゃったから。　携帯を目覚まし代わりにしてるから。
４　FS：え、でも私も目覚まし時計にしてるよ。消したらﾍﾞｯﾄの上に置いた？
５　NS：ううん。　．（他者マーク無調整）②
　　私、ﾍﾞｯﾄないから。
６　FS：えっ。ﾍﾞｯﾄないの？
　　地べたに寝てる？　※不適切な応答
７　NS：地べた？地べたには寝ないよー。（他者マーク）③
８　FS：え、地べたとは言えない？
９　NS：うん、地べたは汚い道の上とか、…地面、
　　ほら、「地べたに座る」っていうでしょ？(他者調整)
10　FS：あー。

この例の場面では、NS が携帯電話を家に忘れていたことで、FS に会う前に、電話で連絡がなされていたのではないか、と思って FS に質問をしている。２で FS が「(電話）していないよ。」というところを「ないよ。」と応答したのに対し、NS は不適切さを感じながら、会話上の流れを考え、３で調整を行わなかった。よって、無調整となっている。
その後、再度、４で FS が「目覚まし時計」を「止めたら」とするところを「消したら」としているが、５で NS は３と同様に、不適切さえを感じていたが、会話の流れを感じて無調整としている。(後で正しい言葉を教え、修正した）
また、そのあと、６でＦＳが発した「地べた」という言葉に対して、７で NS が再度不適切マークを示している。FS は「床」という意味でこれまでこの言葉を使っていたようである。NS はこの時点では説明を行っておらず、不適切さをマークしているだけであるが、その後、８の FS の説明を要求する言葉を受けて、９で「地べた」という言葉の説明を行い意味の調整を行った。

以上のように、この 2 者間のディスコースでは次のような調整パターンが認められた。

	マーク数	自己マーク			他者マーク		
FS	4	3	音声	1	1	音声	
			語彙	2		語彙	1
			文法			文法	
			意味内容			意味内容	
NS	5	1	音声		4	音声	
			語彙	1		語彙	3
			文法			文法	1
			意味内容			意味内容	
合計	9	4			5		

この表を見て分かるように、FS の３つの自己マークのうち、語彙が２、音声が１となっている。ただ、この音声も、例１で「トルク？」と言ったことから、音声的な調整リクエストではなく、語彙の調整であったことも考えられる。また、FS の他者マークも語彙的なものが１つであり、このことから、FS 自身の調整リクエスト内容、聞き返しの内容としては語彙的なもので占められていることが分かる。一方、NS のほうも、FS に対するマークのほとんどが語彙的なものであり、唯一の他者マークにおける文法に対する不適切マークも、「（電話して）ない」というものであり、活用などの間違いではないことから、語彙的な意味合いが強い謝りであると思われる。このようなことから、この FS とのディスコースにおいては、語彙的な問題による調整行動がほとんどであったことから、FS の日本語能力向上のための今後の課題としては、語彙分野の強化が必要と思われ、分析中にアドバイスを行った。ただし、本人もディスコースの中で「語彙の力を伸ばしたい」と述べていることから、既に来日してから今日までの間に自己の弱点としてモニターし、自己評価していたことが分かる。

尾崎（1992）は、初級学習者の聞き返しには動詞型が多く使われ、上級学習者は日本人と同じような聞き返しの表現が使用されていると述べた。FS は日本語能力としては上級に位置することから、確かに聞き返しの表現形式には動詞型は見られなかった。また、Miyazaki(1999)にあるように、聞き返しのストラテジーには「反復・説明要求型」が多いことが FS の発話に見られた。以上のような分析を行ったが、実際に調査を行い、コーパスを作成してみて初めて学習者の発話上の問題や調整行動のパターンが明らかになり、実証研究の重要性を痛感した。しかし、やはり 2 分間の内容では調整行動のバリエーションが限られるため、分析には更に多くのデータが必要となると思われた。また、2 者間では現れなかった問題が複数間では表出するのではないかと思われ、分析上、その必要性を感じたため、以下、複数間におけるディスコースの分析を付加する。

以前、早稲田大学内の「口頭表現」の授業でグループとなり、その会話内容を録音したものを再度聞いてみて、調整行動が現れているところを選出した。

以下、このレポートに付加するものとする。

Ⅱ－２．分析

今回の調査対象者は、早稲田大学語学研究所の口頭表現８Ｄクラスにおいて日本語を学んでいる留学生（C：中国人・男、K：韓国人・女）と、早稲田大学大学院生（T：台湾人・女、J：日本人・女）の４名で、母語話者と非母語話者による「マルチ参加者調整」の分析を試みた。その結果は以下のとおりである。

例１：

調整モデル：他者マーク自己調整（第三者仲介訂正） **フレームデザイン：単純調整** **調整マーカー：調整リクエストマーカー（反復・説明要求）**

１　C：これまでもらった給料 104 万くらいけど。
２　K：えー。104 万。
３　C:：日本に来てから。
４　J：どこに飛んでいったの？
５　C：どこに...（沈黙）**（他者マーク）**
６　J：どこに行ったの？　　**（自己調整①）**
７　K：それ全部食べたの？（**自己調整②）→調整成立◎※「第三者仲介訂正」**
８　C：じゃなくてえ…。

この場面ではＣがお金をアルバイトで儲けても、全然貯まらない、という話をしている。その発言に対して、J（母語話者）が「どうして無くなったのか」という意味で「飛んでった」と比喩的な表現を使用したところ、C は理解できず、「どこに…」の次の言葉を発話しなかったため、これは調整（反復説明）を要求しているものと捉え（尾崎 1993）、６で J が「どこに行ったの」と言い換えた。同時に K がすぐさま「それ、全部食べたの？」と発言をしたため、おそらくＣはＫの発言で理解を示し、８のような返答を行っていると思われる。フォローアップ･インタビューを行っていないため真相は明らかではないが、８の返答内容から察するに、おそらく６の J による発話ではなく、７の K の発言に対する返答であると考えられる。よって、ここで宮崎（2002）の研究にあるように、「3 人以上が調整行動に参加するマルチ参加者調整」が行われたと思われる。また、C と K が非母語話者であったことから、非母語話者同士の「仲介訂正」が行われたことにもなる。この場にいた外国人学生は、みな日本語レベル上級であり、よって、お互いの言葉を訂正するだけの語彙・文法、知識を十分持ち合わせているため調整は難しくないと思われた。

例２：

調整モデル：他者マーク自己調整（第三者仲介訂正） **フレームデザイン：単純調整** **調整マーカー：調整リクエストマーカー（反復・説明要求）**

１　C：へえー、3 時間にやるのかー。
　　化粧にどのくらい時間がかかる↑（？）
２　T：３０分…。

３　J：えー。３０分もしてるの↑（？）
４　T：え、なんか…ホショウ…じゃ、しないの？
５　J・K：ホショウ？（**他者マーク**）
６　T：化粧水とか…。
７　K：ああ、じゃあ、保水とかするから。（**第三者仲介訂正**）
８　T：…うん…。

この場面では、女性の化粧の話をしていて、K の友人が朝化粧に３時間もかけているという話にみんな驚いているところから始まっている。そして、唯一の男性である C が１で T に向けて質問を行ったところ、素肌に近い T が３０分も化粧をしていることに、皆驚いた表情になっていて、それに対して４で T がおそらく「保湿」の意味で「ホショウ」と発言した。それに対し、女性である J と K は理解できず、「ホショウ？」と聞き返し、これは言葉の聞き取りはできたが、意味がわからないときの「反復・説明要求」ではないかと思われる。そこで６で T は「化粧水」という具体的な言葉を使って説明を試み、理解の糸口としようとする。それにヒントを得た K が「保水」という言葉を使って、それにも時間がかかることを聞いた。しかし、J（母語話者：私自身）は「保水」という言葉が初め「ホウスイ」に聞こえたため、この時点ではコメントしておらず、言葉を頭の中で探っていたため、再度調整も試みてない。T も、ここで理解できたのかはフォローアップインタビューをしていないため、分からないが、「そうそう！」という積極的返答はなかったため、理解できてなかった可能性がある。J は推測の後、「保水」であったことが分かった。

このように、マルチ参加者調整場面についても分析を行ってみたが、この学習者たちは非常にレベルが高いため、1 時間の会話の中にもなかなか調整が見られなかった。しかし、この会話を聞いていて、ある傾向に気がついた。それは各学習者の発話の傾向である。ここでは、C が一方的に自分の話をして、ターンを取りつづけたが、C は発話に自信の無い言葉は、自ら訂正して話す傾向にあった。たとえば、「化粧するの、いい気持ち、作られる．．．．作れるでしょう？」とか「アルバイトやって、入ってからよく怒られて．．．叱られて．．．．」と自分の言葉をモニターし、訂正する機会が多かった。つまり、「自己マーク自己調整」の発話が多く見られ、間違いを恐れず発話しつつ、正しい発話をしようという姿勢が見られた。一方、T はここで臆してしまい、あいづちやうなづきの場面が多かったため、声があまり録音されてない。時々発話も行ったが、調整されたため、更にその傾向が強くなった。あとで本人に聞いたところ，他の学習者の日本語が上手かったため、自信がなくなっていたと述べた。そして、一番興味深かったのは K の発話である。彼女は C ほど話さなかったが、肝心な要所要所で発話を行っていた。さきほどの２つの会話例でも分かるように、調整を最終的に行ったのは例１も２も K である。これは、母語話者の調整にも通じるものがあり、言葉に自信がないとできないことだと思われる。彼女は日本に長期住んでいたことがあり、バイリンガルに近い学習者であることから、他者の調整を行う傾向が強いのではないかと思った

このようなことから、非母語話者間の調整にも、それぞれの発話傾向があり、そして同じようなレベルでも、学習者の性格や、日本語の能力、捉え方から、「自己調整」を行いながら話すタイプと、他者の言葉を補い、訂正しつづけるタイプに分かれるのだと感じた。なお、J（私自身）に関して述べると、かなりティーチャートークを行っており、常に発話をリードし，コントロールする傾向があったことを認識した。この会話の時点では、録音の意図がわからず、

ただのおしゃべりに徹していたことから、自然な会話が録音できており、それぞれ興味深い傾向が現れていたと思う。

Ⅲ. まとめ

今回、このレポートを作成するにあたり、初めて意味交渉研究の内容を知り、その会話を録音し分析を行ったが、その結果、これまでとは違った視点でディスコース分析ができるようになったと思われる。また、実際に 2 者間、マルチ参加者調整の交渉を行い、その傾向を考察することで、この意味交渉研究のさまざまな可能性を感じた。今回私が行ったのはいわゆる「協力者場面」の接触場面であったが、これを含めた研究は、宮崎（2002）によると「それぞれの接触場面で、どのようなインターアクションの問題が起きるのか。現時点では、十分な実証研究が行われていない。」とある。また、「これまでの研究は参加者のバリエーションを考慮していない」とあることから、今後は参加者の構成や、その学習背景、発話傾向などについて様々な研究の可能性が存在する分野であるとも思えた。今回、短時間ではあったが、現在の意味交渉研究に少しでも触れることができ、様々な視点から分析し、考察することができたことは本当にいい経験になったと思われる。

＜参考文献＞

Satoshi Miyazaki(1999)Communicative Adjustment and Adjustment Marker; The point of Request for Clarification『第二言語としての日本語研究』３　57－93 頁

宮崎里司（2002）「第二言語習得研究における意味交渉の課題」『早稲田大学日本語教育研究』創刊号　71－89 頁

迫田久美子（2002）『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク

尾崎明人（1992）「「聞き返し」のストラテジーと日本語教育」『日本語研究と日本語教育』251－263 頁　名古屋大学出版会

尾崎明人（1993）「接触場面のストラテジー「聞き返しの発話交換」をめぐって」『日本語教育』81　19－30 頁